

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：38001

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06808

研究課題名(和文) ハワイ沖縄系移民の養豚と差別に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological study of discrimination associated with pig farming by Okinawan immigrants in Hawaii

研究代表者

比嘉 理麻 (HIGA, Rima)

沖縄国際大学・総合文化学部・講師

研究者番号：00755647

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで申請者が沖縄本島で研究してきた養豚と差別という枠組みを、ハワイの沖縄系移民社会へと展開することで、移民先で養豚と結びついた差別がどのように生じ、人びとがそれいかに対処しているかを、沖縄系移民の生業と他の住民との関係、およびオキナワ・リバイバル・ムーブメントの営みとの関連で理解し、新たな理論モデルを提示することを目的とした。

具体的には、まずハワイ沖縄系移民の生業の変遷と差別の重層構造を明らかにした。次に、現在の沖縄系移民にみる養豚の展開と文化復興運動について現地調査を実施した。さらに並行して、移民社会論と、人類学の生業・差別論に関する理論研究を行なった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research was to examine how the development and handling of odor problems and discrimination associated with hog farming by Okinawan immigrants in Hawaii by extending the framework of "hog farming and discrimination" that the applicant studied on the main island of Okinawa. This research attempted to present a new theoretical model by understanding the relationship between Okinawan immigrants and other local residents, as well as Okinawan revival movement activities. To achieve this aim, this study first explained the changes in subsistence and occupations among Okinawan immigrants in Hawaii and the layered structure of discrimination. Next, a field survey was conducted on the history of hog farming and the cultural reconstruction movement seen among today's Okinawan immigrants. In parallel, a theoretical study on the immigrants' society and the anthropological theories on subsistence and discrimination was conducted.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 養豚 人と動物の関係

1. 研究開始当初の背景

(1) 筆者はこれまでのフィールドワークにおいて、沖縄で豚肉が非常に好まれ、大量消費される一方で、その肉を生み出すブタが「くさい」と嫌われ、養豚場排斥運動が起きている点を考察してきた。また他方で、メディアを通して「ブタ好き」というイメージが流布されてもいた。確かに、近年の在来豚アグーの観光資源化や、豚肉の大量消費をみる限り、沖縄社会・文化におけるブタの重要性は疑いえないものである。しかし、その裏側では、ブタの「におい」をめぐる養豚業者と地域住民の対立が起きている。まさに現代沖縄では、養豚という生業をめぐる、ブタという動物をめぐる、人と人のあいだに乗り越えがたい分断が生じているのである。

(2) 筆者は、博士論文とその後の研究において、沖縄本島の養豚場・屠殺場・市場での長期フィールドワークと、歴史文書の分析から、① 養豚場の悪臭問題と排斥運動、② 伝統文化復興運動と観光化の文脈における在来豚アグーの復活、③ 養豚の現場でみられる人とブタの両義的な関係の生成を分析し、従来の沖縄養豚文化研究 [小松 2007; 萩原 2009] において看過されてきた養豚をめぐる排除の構造 (沖縄の支配的な文化がもつ抑圧的側面) を明らかにし、産業社会の人間と家畜を取り巻く複雑な関係を解明してきた [比嘉 2015]。

(3) 以上の特定の生業・産業と結びついた排除や差別の問題は、沖縄という地域的な問題でありながら、その特殊・個別的な問題を越えた広がりをもっている。沖縄本島に限らず、沖縄系移民の移り住んだ諸社会においても同様の問題を生んでいるのである。筆者は、養豚と結びついた差別の広がりを知ったことで、これまで取り組んできた養豚場の悪臭問題と、ブタを介した人と人の変化を他地域にも援用して理解する必要性を感じた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、これまで筆者が沖縄本島で研究してきた養豚と差別という枠組みを、ハワイの沖縄系移民社会へと展開することで、沖縄の内外において時代を前後して生じたブタの悪臭に起因する差別や排除の論理を比較し、より広い視野からこの現象を理解することにある。

(2) 具体的には、ハワイの沖縄系移民社会において、養豚をめぐる生じる排除や差別の構造が成立する歴史的経緯に着目し、沖縄本島との比較研究を行なうことで、移民先で養豚と結びついた差別がどのように生じ、人びとがそれいかに対処しているかを明らかにすることを目指した。

3. 研究の方法

(1) 上記の目的を達成するために、まずハワイ沖縄系移民の生業の変遷と差別の重層構造を明らかにするために、①ハワイにおける養豚を取り巻く状況、②ハワイの生業の全体像とその歴史的変遷、および畜産業・養豚業の統計資料や関連政策、③都市計画や環境政策の動向について文献調査を行なった。

(2) 次に、沖縄系移民が差別されるに至った歴史的経緯を把握するために、ハワイに移り住んだ沖縄出身者たちが、どのようにハワイ社会で受容され、養豚で生計をたてる道を選び、さらに差別されるに至ったかに関して、文献資料を収集した。くわえて、ハワイ大学のオーラル・ヒストリーセンターのデータベースにアクセスし、沖縄系移民のオーラル・ヒストリーのうち、養豚への言及箇所を集中的に収集した。

(3) さらに、現在の沖縄系移民に焦点をあて、養豚と文化復興運動の関係について資料収集を行なった。そこでは、近年、ハワイにおける沖縄系移民の養豚従事者が、非常に数が減っている点をふまえ、移民の生業の変化と差別の構造における関係性に焦点をあてた。具体的には、移民の経験と、養豚という生業・職業の選択の経緯に関する語りを収集するとともに、ブタの飼育状況や具体的な悪臭対策の変遷、および他の移民や近隣住民とのかわりについて資料を収集した。

(4) ハワイ・オアフ島ワイパフ地区のオキナワ・センターを中心とするオキナワ・リバイバル・ムーブメントの調査を行なった。とくに 1990 年代以降のオキナワ・アイデンティティの興隆に着目し、オキナワ・コミュニティにおける文化復興運動の担い手たちが、沖縄語の習得や祭りの開催、伝統舞踊 (エイサー) の伝承と普及、ミュージカルの上演などの活動をいかに立ち上げ、現在に至るかを調査した。そこから、日系移民との比較を通して、オキナワ・アイデンティティ興隆の経緯と特徴を分析した。

(5) 以上の事例研究をふまえ、移民社会論と、人類学の生業・差別論に関する理論研究を行ない、特定の生業や動物と結びついた差別や排除の問題を扱った論文や著作を渉猟し、批判的に検討した。

4. 研究成果

(1) 戦前、ハワイやパラオなどに移り住んだ沖縄出身者の多くは、移民先で慣れ親しんだ養豚で生計をたてる傾向にあった。養豚で成功した沖縄出身者たちは戦後、移民先から大量のブタを寄贈し、沖縄の養豚復興に大きな役割を果たしたとされる。

しかしこうした逸話の裏で、ブタのにおい

を理由とする差別が起きていた点が明らかになった。

(2) 本研究では、沖縄本島とハワイの沖縄系移民社会の比較調査により、養豚従事者に対する排除や差別の構造と歴史過程の共通性と差異を明らかにすることができた。具体的には、沖縄本島では産業化の過程でブタの悪臭問題が生じたのに対して、移民社会では、早くから外部者の視線に晒され、既に自家生産の時代にブタの悪臭を理由とする差別が起きていたのである。

以上の調査により、沖縄本島に限らず、沖縄出身者の移り住んだ移民社会においても、ブタの悪臭問題はみられ、ブタの飼育者に対して同様の差別や排除を生んでいる点が明らかになった。

(3) 上記の歴史分析と並行して、ハワイのオキナワ・コミュニティで語り継がれ、近年ではミュージカルとなってハワイや沖縄の地で繰り返し上演され、リバイバル・ムーブメントの重要な一部を成している、祖国・沖縄の養豚復興の物語の調査を行なった。

具体的には、戦後まもない1948年に、ハワイ在住の沖縄出身者たちが537頭ものブタを沖縄に贈り届け、祖国の養豚復興に一役かった逸話の記録を収集するとともに、ミュージカル誕生の経緯を明らかにした。それによって、沖縄の人びとや沖縄系移民のアイデンティティの中心を成す養豚や豚肉料理が、一方で差別の原因となりながらも、他方で文化復興運動のなかに位置づけられ、沖縄と移民社会を結びつける枠組みを分析した。

(4) 以上の事例研究をもとに、移民・生業・差別という3つの問題系にまたがる事象を総合的に捉える枠組みを構築した。概して、人類学の生業研究では、移民と差別の問題が取り上げられることは稀であった。逆に、移民研究においても、生業と結びついた差別の問題が正面から取り上げられることは極めて少なかった。ハワイの日系・沖縄系移民に関する先行研究では、生業と結びついた差別の問題を扱ったものが少ない[e.g. Kimura 1992]。最近になってようやく、日系の漁業とそこでの排斥問題を扱った歴史学の研究[小川 2011; Ogawa 2015]が現われたが、養豚の現代的展開を捉えた研究は未だない。

これらの状況をふまえ、本研究では、(1)から(4)までの事例研究をもとに、①本国での生業・職業・動物の位置づけが移民先へと、持ち込まれる、という差別化の論理、②その際に、においといった感覚のレベルで排除・差別が生じるということ、③においがエスニック・マーカーとして機能し、他集団との差異の指標になるということ、④そうした差異化・差別化の論理に対して、沖縄出身者自らのアイデンティティの拠り所として、あるい

は、祖国とのつながりの拠り所として、むしろ養豚やブタを積極的に位置づけ、肯定的な評価を付与していく資源化のプロセス、を分析し考察した。

(5) 以上、本研究では、沖縄とハワイ移民社会の両方で、時代を前後して生じた養豚をめぐる住民間の対立や排除の経緯を明らかにすることで、養豚従事者と地域住民の相互理解の道を探り、地域社会と養豚の共存を可能にする枠組みを構築することができた。

これらの成果は、①感覚と差別論、人と動物の関係論といった学術研究のみならず、②人と動物の分断が、人と人のあいだに乗り越えがたい分断を引き起こしている、他の地域社会にも実践的に貢献しうる。

〈引用文献〉

- ①小川真和子 2011 「ハワイにおける日本人漁業者排斥について」『地域漁業研究』51(2): 69-89。
- ②Ogawa Manako 2015 *Sea of Opportunity: The Japanese Pioneers of the Fishing Industry in Hawaii*, University of Hawaii Press.
- ③Kimura Yukiko 1992 *Issei: Japanese Immigrants in Hawaii*, University of Hawaii Press.
- ④小松かおり 2007 「在来家畜の商品化」『生きる場の人類学』河合香史編、京都大学学術出版会、pp. 365-385。
- ⑤萩原左人 2009 「肉食の民俗誌」『南島の暮らし』古家信平他編、吉川弘文館、pp. 195-278。
- ⑥比嘉理麻 2015 『沖縄の人とブタ—産業社会における人と動物の民族誌』京都大学学術出版会。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- ①比嘉理麻、「食べられるブタ、嫌われるブタ、愛でられるブタ—沖縄のブタ食文化から考える—」、赤江雄一編『食べる—生命の教養学12(仮題)』、慶應義塾大学出版会(図書所収論文)、査読無、2017、印刷中。
- ②比嘉理麻、「沖縄料理の健康法—豚を食べ尽くす」『Vesta』、102巻、pp. 14-16、査読無、2016。

〔学会発表〕(計5件)

- ①〔招待講演〕比嘉理麻、「豚と肉と「わたし」」『食べられるセミナー 夜と生活工房 第二夜 夜と肉』生活工房(東京都・世田谷区) 2017年2月28日。

- ②比嘉理麻、「ブタとの関わりと断絶」『国立民族学博物館・共同研究会：消費からみた狩猟研究の新展開－野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究』、国立民族学博物館（大阪府・吹田市）、2016年10月16日。
- ③〔招待講演〕比嘉理麻、「ブタへの嫌悪と好意に揺れる沖縄－産業化に伴う悪臭言説の登場と在来種復興運動－」琉球沖縄学会、国立海洋博物館（韓国・釜山）、2016年9月24日。
- ④〔招待講演〕比嘉理麻、「沖縄のブタと人－産業社会の矛盾をうつす好悪の揺らぎ」第4回「大学と社会が拓く未来の知－動物から現代社会を考える」、京都大学（京都府・京都市）、2016年7月29日。
- ⑤〔招待講演〕比嘉理麻、「ブタからの問い－沖縄における人－ブタの関係史」『協定校間学術交流講演会（「食」をめぐる感性）』、沖縄国際大学・南島文化研究所（沖縄県・宜野湾市）2015年12月7日。

〔その他〕

新聞報道

- ①『読売新聞』2017年8月26日付、特別面、講演会「動物から現代社会を考える」（上記・招待講演④）の特集記事。
- ②『日本農業新聞』2016年1月10日付、読書面、著者インタビュー。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

比嘉 理麻 (HIGA, Rima)
沖縄国際大学・総合文化学部・講師
研究者番号：00755647